

詩

篇

一九五九・六・二五・

心藏と陰影

林田盛雄

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18

嶺外船の文

何作

貴方久々名聞ある如き方割を施す

事ある

それは一個のアイビーの生徒が

本は通す

(三) 伊

それ

飛田マッヤ様の定例の通例と

轉曳の微風

侯何微若美を湛へて港海の曙曳を放送しや
ア

報く襟のそ散り砕くる波の上に
水色の陸上勿入の陸落一と想ひ給へ

街燈の収斂後母照燈 晝春帛

晝春が以てする音響とアノ和を誤回化一
たししも

情慾と夜露の誘惑を鏡寫する本性
に何か残すか

小生の長期遠洋航海の留意が

機、隙をみすみめ微風はさうもあつた
ふた

志 嬌

恒 恒

僥は急病な所僥を越大する

例へば

尖鋭面光りも忘布し和夫を悼み

頭惱がせめじめと霜所重に染るはるやうに

僥は父を父とし受す方こそした

例へば

曰々の努力が大僥に

君卓の前では何と思ふおに

半日でも一日でも夏景をいたあやうに

次郎の志外に金銀をいたあやうに

にに 復を起す

僥は性かに僥を起す

多断断が僥を占有して

急病な其処か

候が甚処かりやうに急病を知りてみる

生活の重荷

あるうたけの情熱で
あるうたけの喜びで
常軌の連鎖に血を流さず
僕も時針を止めよう

僕も一歩、大樹で
この惨劇を止めよう
蒼き色を喰ひし
何故か、死にかかっている

僕も破れ靴に大樹の熱情を感じて
あるから
それは僕も、死んでも、現境、粗食
ふいふとき、聖地はあ

之日のサレぬ

食へば過ちば多し
開放したる神秘の風景に

眉は情熱を
閉ぢ、瞳に、愛の傷が
形、鮮やかな映り
新形式が君を箱に閉ぢる

若くは年々
鮎は貝殻の穴から
花は散る文を
大膽な散る文は

厚々
保体を描く

サレぬ

文七

透視し
描く

新し
描く

康中 嵯 溪谷の美

何れ

夜明け前の山鳥

漢市

蔭影を ~~木~~ 揺る木

山を撫つて 溪谷の 雲気は 空を感ずる

空を 雲に 倦は 顔感弱す

倦は 已 藤を 執ける

流に 逆 倒映する 倦に

神は 暁 時を

表す 糸を 父 母 子 女

山 腹の

祝 儀を

倦は 受 納する

空を 花

静 寂 友 空 空の 空 空

空 空 空

溪谷の 空を 花

倦は 空を 花を 花を 花を

空を 花を 花を 花を

花を 花を 花を 花を

倦は 脱 衣 如く 空を 空する

起亮

ラカカカ聴くオウ
女主人は色車に上を差してオウ
久目の夕空はカーミを訴えす
儘に馬車から今更なれたはあり

絶へず自由に

只

夕露の夕空

夕空之

夕空

夕空の革命に生命を吐き出す
病にたう

後の脈に注書す

映象は適用す

夢野は読ま

相推し左陽性で荒れ地の一帯を運ん

情盛りの一帯をまき禱にす

神や

焼ける 今日心臓を

僕に重にややこみ

海に アイスクリューにカネナナ作

報はあぐた

陣ありに日心臓を

僕に重にやこみ

夢野は読ま 僕を解き

信の性馬は好いものたるゝ位

秘長をす

海と娘

何れ

白く花が萌え

白く花が

香り花群た海の頬から

赤く花 黄く花 横の花がほく

ニれの海濱に撒かれた女人群集の項に

ハにを付けた 海を渡った

ハにを付けた 微塵を望み

ヤニキーカーン

陽だの 樹木の 滴の 風を

六日の風景

毎夜遅くアイスクリークを食べると 胃を
壊すと。

美陰 暑く日が続くと 暑さに頭を

崩すのを

不満の吐き棄て場もよく夕方後には春を以て
一とあると リフの目には 不満が青春の情
に響くのを 女さうめに変わらる事

今日黙々と 僕はツラツラと草を刈つた
道に断崖かすは夜外に暮れに花野の田舎
活劇な情景を贈る事

今日の夜半は あらゆる既成な感情を捨て
て、無限の活劇を活劇に 花野を歩き

僕は 寝り お早自動車に乗るに寝る

肩サレ、ウイキを食った、おめさた

僕は 召喚食後の僕を 夢を 夜にめする

居寝は、僕の心を 生生と六日の風景に醒

めさせ

僕は 多く、労働者のまじり 終日 天候

金やなめた面を 墨色

誘惑、嘲笑、奔弄する小鳥の群に
猫の尻尾を逆にとせよます

アケビヤの梅の股から

ハワカーの29歳の指入、芸笑を釋はし、道を

贈した。

僕の眼鏡に刺さった流汗は 由緒ある

贈り物
既知した

へんに紙めく木で 白くてぬを 振るうた

僕は夢の双のゆを想ひに 帰還した

とら 心臓の窓をく 針を刺した。 縫い針がこぼれた

僕は性心の指を 現行犯を 逃れすうた

負ふ臭いつた
不仕野羅の神経失た

寝不足の女主人は
今朝も水管の水漏に牡を怒之兼ある

節々

何故は
危るを又分ける

僕は莫越ひはあ

神経疲勞は睡眠不足だ

幻想は女だ

僕は二十五 十時目の勞働は六弗の

一酒、活動、アイスクリーム、瓦竈一ちの

不拂小ち手だ

わ

僕は使用家のスタンプを業、いかりこる

傭生活は一片の斜に過ぎた

蛸と恋人

分思

うけ

四月の花辨は雨を招はなり 招待

併し、舟は次の一行を要さ候へます
樹の枝で雨は雨を招はなり 招はなり

白く花辨が露にぬれぬ

いなり 白に赤い42に熟れ

一そを誰か金ドヤうとも

昔の恋人よ

薄れ色の乳頭は今頃恋人を誘ふ

薄れ色ーこの聲を返す白蛇が

黄のなかに血のやうに破壊

舟はもう一そを要さ候へ

花をゆいで ~~薄れ色~~

雨は四月の微笑に雨を招はなり

心機と暗算

Love and money

相貌姪君は太田の御人々を愛慕し来りて

看すは私こそその横に腰を叩くは

御人は^釋刻^た行色に見惚れこみ

看すは^左御人を見すこころ

御人は^左色を御卓めた座を揺り

私は日々御微笑に慕われこみ

御人は決断を難談を始めやとす

看すは^左留を留めし御人の難談を聴こみ

私は^左夢の煙草を御人に贈つた。

御人は^左夢の煙草は何か知る看すを怖やとす

御人は^左ハコに物を看すを感いやりとする

私はこの太田の御人々を^知知る

私はこの看すの時こそ春を抱擁しやりたり

私は御人と看すを^知知る

いさすすたる光を睡こころ

双児の世

双児を生れた母親は

右と左に双児を抱擁し、子守唄を歌うた

双児は母の着物は目み抱き、睡を文さし、

双児は、お乳をもう、右寺

母親は二人の花嫁に双児の幼友、当時の笑伸話

を、笑ひ、語りに聞かした

双児は、別々、別々に、操々た、

母親は一人の孫を抱りて、

その嬰子の息に、さう、見惚れた

母親は一人の孫に、双児のり方、た、

母親は、若う、日の光、た、た、

昔、唄うた、子守唄を、歌、う、

お乳の背を、抱く、た、た、

孫は、つみ、つみ、双、

その、つみ、つみ、母、

煙突と花束

文化と理智を生えたる煙突は新鮮な空氣に
不潔を吐き棄てけり

我に怒めよ、天の一角と海を覗くのみ

私は空を想ひし

空は天性を成るの程に空も空也なり

如月の日は、知る、美あり、望し

人生の如くは教へたる

新鮮が再生し

是等物が増えし

人声や、花や、空、交錯し

古い工場や、壊れ

新刊書が、散らばる

私は黙然と

路傍に轉んだ子供が、聲かに起き、静かに去る

去るたのち

轉入心跡に風を砂塵を捲き上げてみたのを

そのは復たの此息を嘆笑とすを

情動は愛女の聲を以て聞きた

此等の呻吟は人生を疾走とせ

新しう煙をく草を視き如めた

永は微矣あり

蒼空

蒼空を抱きた 夕日の花 来の香りを

山棲の人々

天と地の真境に人々歩く

青と緑の山頂に人生が生れる

無限に横がった天空の深淵から

光は

曇は

自然の嘯聲は

原始の姿で絶え間なく押し寄せ訪われる

この青緑の温泉の中で

夫婦と親子が語り合ひ笑ひ合ひ

爽快な人世の真実を愛する情が生育くちでぬる

山頂から何年か見え

空が見え

山々見え

澄み輝く海が奥へ見え

田舎者の人界から陽明者達の喧擾が遠く聞

この山櫃には

總てのものに明日の希望が委せられ
沈黙を讃め給へる雲の一粒にも

定めなき明朝の所をたくはへることを
千古にききしむ

草十の芽萌へにさへ

新生の證美教へに導かれてあゝやうな

流の響

窓の隅に洗う

樹々の枯葉を拂う

雨は剣^リの刃^リで街路に溜を捲りて流れる

天が也^リ上の藍色をあふなつて

大地の葛葉に胚胎の嬌態を注ぐのた

乾き焦し憔悴してゐる水の心に潤を充たす^た

水は終日晝夜に閑を競つて

この水の音

光るお水^人の音^曲をじつと聴いてゐる

水は金屬性の音を響を奏す

水は女の声も響かせる

水の音は誰か水を子にやうな

水はまた水に言ひあふ

水は理知らずに吟けたりな

